

# サバヒー餌料化試験

鹿児島県の近海カツオ一本釣漁業は平成10年で生産量約18,000トンあり、海面漁業の12.4%を占めています。その餌料はカタクチイワシを主体に一部地域ではキビナゴを活餌として使用しています。しかし、これら活餌の漁獲の減少によっては操業に支障をきたします。このため、これらの代替餌料として台湾、フィリピン、インドネシアなどでミルクフィッシュとして広く養殖されているサバヒーに着目し、本年度からサバヒー餌料化試験に取り組むこととなりました。指宿内水面分場では、淡水でのサバヒー飼育技術開発に取り組むこととなり、まず6月8日にインドネシアから稚魚100,000尾導入しました。

## 1. 成長

導入後10日間は室内FRP水槽で餌付けし、その後、屋外のコンクリート水槽や網生簀(3m×3m×0.5m)に移し飼育したところ約50日で全長5cm以上に成長し、カツオ漁船の餌料として使用できるサイズとなりました(図1)。また飼育中の水温は29~32℃でした。

## 2. 歩留まり

6月9日以降の各測定用サンプルやカツオ船への積込み等を含め8月21日現在で53,986尾が確認され、歩留まりは55.4%でした。導入時にシラス期の稚魚が約4割を占め、それらが餌に付かず死に殆ど死したものと考えられます。

## 3. 試験操業

8月2日、名瀬市漁協所属の第十一金紘

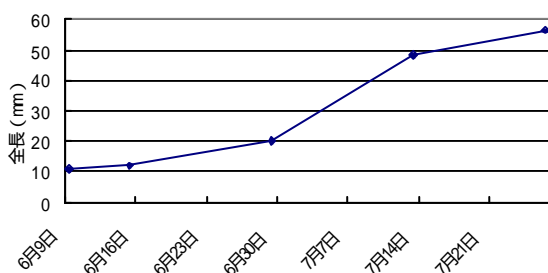


図1 サバヒーの成長経過

丸に約20,000尾を積込み、漁業部や他の関係機関の協力を得、試験操業したところ、カタクチイワシと遜色の無い釣果が得られ、餌料として十分使えることがわかりました。何よりも淡水から海水への馴致が容易であること、漁場までへい死が殆ど無いこと、25~33℃が適水温で、カタクチイワシと異なり30℃以上の水温にも強いことが魅力です。

## 4. 今後の課題

本事業はまだ始まったばかりで様々な課題が山積されています。当面は飼育技術の開発ですが、外国から導入した稚魚は今回のようにシラス期のものも多く含まれ、これらはなかなか餌に付きません。このようなことから成長に差が生じやすく、飼育過程において頻繁な選別が必要となってきます。サバヒーの鱗は剥がれやすく魚体がスレやすいためスレ等の生じにくい選別方法の確立が必要です。

また、現在は種苗の導入はサバヒー養殖が盛んなインドネシアや台湾から導入せざるを得ない状況にあります(ちなみにインドネシアでは食用として年間13万トンの生産量がある)。種苗の価格が2.3~4.5円/尾であるため、サバヒーをカツオ一本釣の活餌として定着させるためには種苗生産技術開発が急務となってきます。その他にも今後は疾病対策、初期餌料の検討、親魚養成、民間養殖場での飼育の可能性等、様々な方面から検討しなければなりません。(指宿内水面分場 立石)

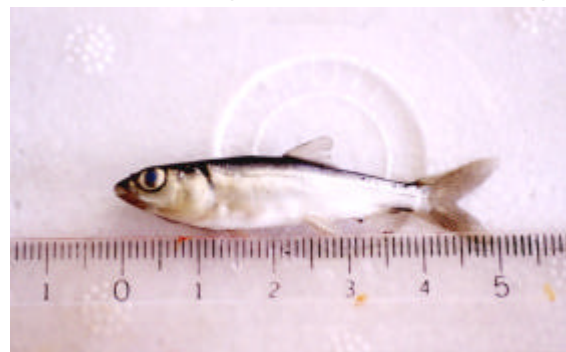


図2 試験操業用のサバヒー